

2009年(平成21年)

4月18日 土曜日

琉球新報

THE RYUKYU SHIMPO

第36025号

発行所	琉球新報社
郵便番号	900-8525
住所	那覇市天久905番地
私書箱	〒900-8656
	那覇中央郵便局私書箱15号
©琉球新報社2009年	

新たな重要文化財の指定について答申された「津嘉山酒造所施設」
＝15日、名護市



津嘉山酒造所 重文に

国の文化審議会(西原鈴子会長)は十七日、名護市にある泡盛醸造所「津嘉山酒造所施設」など、全国で七件の建造物を重要文化財(建造物)に新規指定するよう塩谷立文部科学相に答申した。答申通り告示する予定で、県内の建造物分野の重要文化財は計二十一件となる。津嘉山酒造所は一九二七年から二八年にかけて、施設を現在地に建設し、泡盛の生産を始めたとみられる。泡盛醸造施設と居住部分を一体とした独特の構成を持つ主屋と麹屋からなり、構造は木造で奇棟造、本瓦葺。創業者は津嘉山朝保。昭和初頭に整えられた酒造施設の形態を良好にとどめ、伝統的な泡盛の製造工程

を知ることができ、居住部分分は、伝統的な平面構成を受け継ぎながら、離れや玄関を構えるなど随所に近代的な展開も併せ持ち、沖縄の住宅の歴史を知る上でも重要な施設。(25面に関連)

重文に津嘉山酒造所

市民活動が結実 「国頭の華」咲く

【名護】八十余年前に名護の酒屋として産声を上げ、戦火をくぐり抜けて今も操業を続ける津嘉山酒造所が国の重要文化財に指定されることになった。老朽化し、崩壊の危機にさらされながらも、建物の保存に多くの市民が協力し、その熱意が指定の大きな原動力になった。銘柄の「国華」は「国頭の華になりたい」との創業時の理念を表す。関係者は「華を一つ咲かすことができた」と喜んだ。

現存する赤瓦ぶきの木造建築物としては県内最大級。沖繩戦で名護市内の建物はほとんど破壊されたが、施設はほぼそのままの形で残された。内部には米軍に接収された当時の面影も残る。ただ屋根の骨組み、柱、壁などの傷みが激しく、大規模な補修が急務となっている。

四代目となる同社代表の瑞慶村實さんは「名護の街にこの建物が残っていく姿を思い浮かべた」と感慨深げ。「代々の経営者もほんとううれしく思っ

戦火くぐり、操業80年余

るだろう」と話した。酒造りを一時休業したこともあったが、「国華」ファンは多い。今後は泡盛の品質向上と観光資源への貢献を図っていく考えだ。

四年前に発足した「津嘉山酒屋保存の会」は貴重な建物の意義を市民に考えてもらおうと、多彩なイベントを開催。宮城調福会長は「会員、ボランティアの多くの協力があった。指定は保存に向けた第一歩。うれしく思う」と喜んだ。

市文化財保存調査委員会の岸

本林議長は「戦前から残っている泡盛工場はここだけ。当時としては珍しい玄関など、建物にはいろんな特徴がある。うまく活用すれば市街地活性化の目玉になる」と語った。



重要文化財の指定が決まり、喜ぶ瑞慶村代表(中央)ら「名護市中大の同酒造所